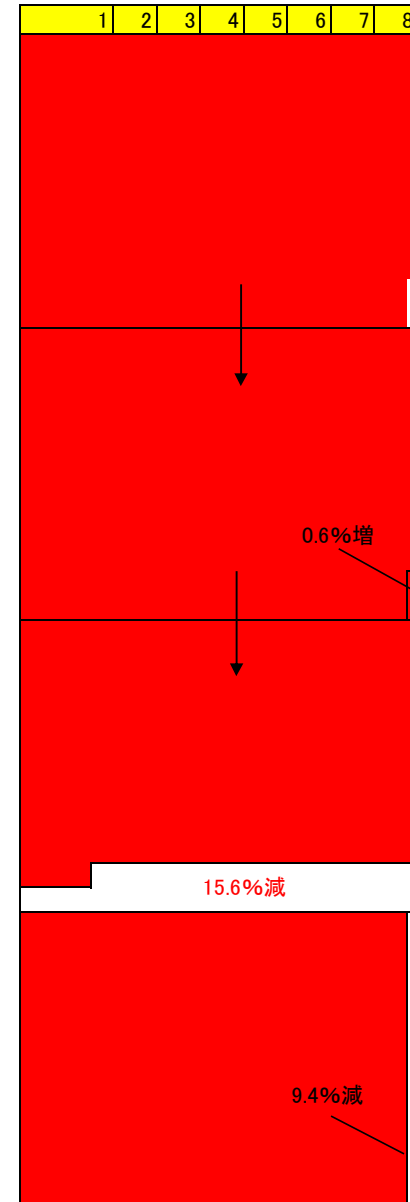


電気使用量 集計

年 月	kw	平均気温	冷暖平均	※基準比	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	※基準比	半期集計	年間集計
13 5	5,450	18.1		0.1																		
13 6	7,440	21.6		0.4																		
13 7	9,482	26.8	23.6	1.1																		
13 8	6,002	24.4		-1.8																		
13 9	5,412	21.4		-1.6																		
13 10	6,259	16.1		-0.3																		
13 11	9,487	9.9		-0.4																		
13 12	10,606	4.4		-0.2																		
14 1	13,162	4.0	6.6	2.6																		
14 2	9,564	5.2		2.0																		
14 3	7,946	9.4		2.4																		
14 4	4,606	14.1		0.7																		
14 5	5,057	16.7		-1.4																		
14 6	5,448	20.0		-1.6																		
14 7	10,409	26.3	23.5	-0.5																		
14 8	8,414	26.4		2.0																		
14 9	5,695	21.3		-0.1																		
14 10	5,981	16.3		0.2																		
14 11	9,427	7.9		-2.0																		
14 12	11,424	3.7		-0.7																		
15 1	11,206	2.2	4.7	-1.8																		
15 2	10,058	3.6		-1.6																		
15 3	8,570	6.2		-3.2																		
15 4	4,344	13.0		-1.1																		
15 5	4,130	17.4		-0.7																		
15 6	4,882	21.7		1.6																		
15 7	5,518	21.2	22.4	0.5																		
15 8	6,336	24.5		-2.0																		
15 9	3,863	22.3		0.1																		
15 10	4,301	15.4		-0.2																		
15 11	8,383	12.2		2.0																		
15 12	10,114	5.2		0.7																		
16 1	11,700	2.8	6.5	1.8																		
16 2	9,948	5.0		1.6																		
16 3	7,589	7.3		3.2																		
16 4	3,802	13.9		1.1																		
16 5	4,757	17.8		-0.3																		
16 6	4,573	22.3		0.7																		
16 7	8,292	26.4	24.3	-0.4																		
16 8	6,905	25.2		0.8																		
16 9	4,968	23.1		1.7																		
16 10	4,992	15.3		-0.8																		
16 11	6,878	12.5		2.6																		
16 12	8,436	6.2		1.8																		
17 1	12,206	2.4	6.1	-1.6																		
17 2	10,380	3.1		-2.1																		
17 3	9,288	6.1		-3.3																		
17 4	4,750	12.8		-1.3																		



電気使用量 集計
第2期中期3ヶ年計画 H17.5.1~H20.4.30

年 月	kw	平均気温	冷暖平均	※基準比	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	※基準比	半期集計	年間集計
17 5	4,346	16.2		-1.9																-20.26%		
17 6	5,520	22.3	23.9	0.7																-25.81%	35,977	85,906
17 7	7,610	24.0		-2.8															-19.74%			
17 8	8,306	26.3		1.9															38.39%			
17 9	5,539	23.1		1.7															2.35%			
17 10	4,656	17.3		1.2															-25.61%	49,929	-10.0%	
17 11	7,440	9.8	5.1	-0.1														-21.58%				
17 12	9,804	2.4		-2.0														-7.56%				
18 1	11,527	1.7		-2.3															-12.42%			
18 2	8,966	4.2		-1.0															-6.25%	200.0 万円		
18 3	7,608	7.4	-2.0															-4.25%				
18 4	4,584	11.6	-2.5															-0.48%				
18 5	4,682	17.3		-0.8															-14.09%		33,101	75,565
18 6	3,697	21.2	23.3	-0.4															-50.31%			
18 7	7,416	23.9		-2.9															-21.79%			
18 8	7,932	26.3		1.9															32.16%			
18 9	4,452	21.9		0.5															-17.74%			
18 10	4,922	17.4		1.3															-21.36%	42,464	-20.8%	
18 11	7,358	11.4	7.1	1.5															-22.44%			
18 12	6,934	6.2		1.8															-34.62%			
19 1	8,880	4.2		0.2															-32.53%			
19 2	7,462	5.7		0.5															-21.98%	169.6 万円		
19 3	7,152	8.0	-1.4															-9.99%				
19 4	4,678	11.7	-2.4															1.56%				
19 5	4,121	18.0		-0.1															-24.39%		29,273	64,065
19 6	5,011	21.9	23.9	0.3															-32.65%			
19 7	5,393	22.8		-4.0															-43.12%			
19 8	6,158	27.2		2.8															2.60%			
19 9	4,397	23.6		2.2															-18.75%			
19 10	4,193	16.8		0.7															-33.01%	34,792	-32.9%	
19 11	5,810	10.2	5.9	0.3															-38.76%			
19 12	6,235	5.6		1.2															-41.21%			
20 1	7,802	2.7		-1.3															-40.72%			
20 2	6,343	2.6		-2.6															-33.68%	140.3 万円		
20 3	5,182	8.2	-1.2															-34.78%				
20 4	3,420	13.1	-1.0															-25.75%				

※基準比
(平均気温の基準比とは?)
(使用量の基準比とは?)
=第1期中期3ヶ年計画の月別
平均値と当月の平均値の差

今年の地球、観測史上2番目の暑さ…WMO声明

【ジュネーブ=渡辺覚】国連の世界気象機関(WMO)は15日、2005年は、観測史上2番目に暑い年だったとする報告書「2005年の地球気候の現状に関する声明」を発表した。

報告書によると、これまでのところ2005年は、陸地や海を含めた地球表面の平均気温が、観測記録の残る1861年以来2番目に高く、比較の基準としている1961~90年の平均(14度)を0.48度上回った。特に北半球は、同平均を0.65度上回る史上最高を記録した。
ただ、南米ペルー沖の太平洋で海水温が上昇するエルニーニョ現象が過去最大規模だった98年の水準には及ばない見通しだという。
(読売新聞) - 12月16日3時10分更新

電気使用量 集計
第3期中期3ヶ年計画 H20.5.1～H23.4.30

年	月	kw	平均気温	冷暖平均	※基準比	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	※基準比	半期集計	年間集計	
20	5	3,478	17.3		-0.8																-36.18%			
20	6	3,905	20.5	23.4	-1.1																-47.51%	23,187	55,381	
20	7	5,563	25.4		-1.4																			-41.33%
20	8	3,536	25.1		0.7																			-41.09%
20	9	2,831	22.5		1.1																			-47.69%
20	10	3,874	17.1		1.0																-38.11%	32,194	-42.0%	
20	11	5,124	10.1	0.2																				-45.99%
20	12	5,390	6.4	2.0																				-49.18%
21	1	7,087	3.6	6.5	-0.4																			-46.16%
21	2	6,305	5.0		-0.2																		-34.08%	
21	3	5,074	7.5		-1.9																		-36.14%	
21	4	3,214	13.6		-0.5																		-30.22%	
21	5	3,406	18.9		0.8																	-37.50%	25,028	59,008
21	6	4,020	21.3	-0.3																		-45.97%		
21	7	4,781	24.9	-1.9																		-49.58%		
21	8	4,699	24.9	0.5																		-21.71%		
21	9	3,936	21.5		0.1																	-27.27%	33,980	-38.2%
21	10	4,186	16.6	0.5																		-33.12%		
21	11	5,491	10.8	0.9																		-42.12%		
21	12	5,866	6.0	1.6																		-44.69%		
22	1	7,457	3.3	6.2	-0.7																		-43.34%	
22	2	6,353	4.0		-1.2																		-33.57%	
22	3	5,316	6.9		-2.5																		-33.10%	
22	4	3,497	10.6		-3.5																		-24.08%	
22	5	3,202	17.4		-0.7																	-41.25%	25,418	53,983
22	6	4,315	22.3	0.7																		-42.00%		
22	7	5,208	26.5	-0.3																		-45.07%		
22	8	5,753	28.1	3.7																		-4.15%		
22	9	3,458	23.4	2.0																		-36.10%	28,565	-43.4%
22	10	3,482	17.4	1.3																		-44.37%		
22	11	4,356	10.8	0.9																		-54.08%		
22	12	4,961	6.7	2.3																		-53.22%		
23	1	6,792	1.5	5.8	-2.5																		-48.40%	
23	2	5,441	4.5		-0.7																		-43.11%	
23	3	4,380	5.5		-3.9																		-44.88%	
23	4	2,635	12.1		-2.0																		-42.79%	

昨年の温室効果ガス濃度世界最高に…WMO

世界気象機関(WMO)は23日、大気中の温室効果ガス濃度が昨年、産業革命以降で最高になったと発表した。

地球温暖化への影響が一番高いと考えられている二酸化炭素濃度(CO2)は2007年に比べ2.0ppm上昇し385.2ppmに、メタンは同じく7ppb増え1.797ppbに、一酸化窒素(N2O)は0.9ppb増の321.8ppbとなった。ハロカーボンもフロンガス規制でクロロフルオロカーボンなどは少しずつ減っているものの代替フロンが急激に増え、これらの温室効果が心配されている。
大気中のCO2濃度は、化石燃料の大量消費など人為的な影響がほとんどなかった産業革命以前の1750年までは280ppmとほぼ一定に保たれていたが、その後、上昇を続けている。温室効果への影響力をみる放射抗力(radiative forcing)と比較すると、もっとも影響の大きいのはCO2で、1750年に比べ温室効果ガスによる地球温暖化影響増加分の63.5%を占めている。次いでメタンが18.2%、N2Oが6.2%で、残り12%がハロカーボンとなっている。
(サイエンスポータル) - 2009年11月24日

今年の世界平均気温、平年より0.36℃高…気象庁

気象庁は今年の世界、日本の気温の速報値を発表、世界の気温は平年値に比べ0.36℃高く、1891年以降では2番目に高かったことを明らかにした。日本は平年値に比べ0.85℃高く、これは1891年以降では4番目に高い値だった。
平年値というのは、1891-2000年の30年間平均値をいう。1990年以降、高温の年がしばしばあり、この理由について気象庁は温室効果ガスの増加に伴う地球温暖化と数年から数十年程度の規模で繰り返される自然変動によると見ており、今年の平均気温が高いのはこれに昨年夏から今年春まで持続したエルニーニョ現象が影響しているためとしている。
100年間でみると、世界の気温は0.68℃、日本の気温は1.15℃の割合でそれぞれ上昇している。
(サイエンスポータル) - 2010年12月22日

東日本大震災に伴い
計画停電

電気使用量 集計
第4期中期3ヶ年計画 H23.5.1～H26.4.30

年	月	kw	平均気温	冷暖平均	※基準比	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	※基準比	半期集計	年間集計	
23	5	2,875	17.2		-0.9																-47.25%			
23	6	3,050	21.8	24.3	0.2																-59.01%	19,307	46,626	
23	7	3,602	26.0		-0.8																			-62.01%
23	8	3,826	25.9		1.5																			-36.25%
23	9	3,007	23.5		2.1																			-44.44%
23	10	2,947	17.0		0.9																-52.92%			
23	11	4,368	11.5	5.2	1.6																	-53.96%	27,319	-51.1%
23	12	4,762	3.9		-0.5																	-55.10%		
24	1	5,810	1.5		-2.5																	-42.26%		
24	2	5,522	2.6		-2.6																	-44.90%		
24	3	4,378	6.4		-3.0																-46.18%		106.9	
24	4	2,479	12.2		-1.9																	-50.7%	万円	
24	5	2,345	17.8		-0.3																	-56.97%		
24	6	2,417	20.1	24.3	-1.5																	-67.51%	18,655	43,958
24	7	3,756	25.2		-1.6																	-60.39%		
24	8	4,368	27.6		3.2																	-27.22%		
24	9	3,175	24.4		3.0																	-41.33%		
24	10	2,594	17.0		0.9																	-58.56%		
24	11	3,691	9.3	5.6	-0.6																	-61.09%	25,303	-53.9%
24	12	4,474	4.0		-0.4																	-57.82%		
25	1	6,499	2.1		-1.9																	-50.62%		
25	2	5,407	2.8		-2.4																	-43.47%		
25	3	3,050	9.6		0.2																	-61.62%		123.0
25	4	2,182	12.1		-2.0																	-52.63%	万円	
25	5	2,261	17.8		-0.3																	-58.51%		
25	6	2,882	21.6	24.1	0.0																	-61.26%	17,935	42,931
25	7	3,478	25.1		-1.7																	-63.32%		
25	8	3,605	26.9		2.5																	-39.94%		
25	9	3,014	22.9		1.5																	-44.31%		
25	10	2,695	17.8		1.7																	-56.94%		
25	11	3,830	9.7	5.4	-0.2																	-59.63%	24,996	-55.0%
25	12	4,390	4.8		0.4																	-58.61%		
26	1	5,926	2.3		-1.7																	-54.98%		
26	2	5,138	2.8		-2.4																	-46.28%		
26	3	3,648	7.6		-1.8																	-54.09%		129.1
26	4	2,064	12.8		-1.3																	-55.19%	万円	

2011年(平成23年)の世界と日本の年平均気温について

気象庁は1日、世界と日本の年間平均気温について発表。
2011年、世界の年平均気温(陸域における地表付近の気温と海面水温の平均)の偏差は+0.07°Cで、1981年以降12番目に高い値となりました。
2011年の日本の年平均気温偏差*1は+0.15°Cで、1898年以降では17番目に高い値となりました。
近年、世界と日本で高温となる年が頻出している要因としては、二酸化炭素などの温室効果ガスの増加に伴う地球温暖化の影響に、数年～数十年程度の時間規模で繰り返される自然変動が重なったものと考えられます。2011年の世界の年平均気温が2010年に比べて低くなった要因の一つとしては、2011年春まで持続し、また2011年秋から発生しているラニーニャ現象の影響が考えられます。
(気象庁) - 2012年2月1日

今年(平成24年)の南極オゾンホール

今年の南極上空のオゾンホールは、9月下旬に最盛期を迎えて南極大陸の約1.5倍まで拡大しましたが、1990年代以降で最も小さい規模となりました。
オゾンホールの面積は、1990年代以降で最小となりましたが、長期的にみると1980年代前半と比較して依然として規模の大きい状態が継続しています。これは、南極上空のオゾン層破壊物質の濃度は緩やかに減少しているものの、依然として高い状態にあるためです。
(気象庁) - 2012年10月24日

平成26年2月の気象

- ・太平洋側では2度、大雪に見舞われ、関東甲信地方を中心に記録的な大雪となった。
- ・低気圧が日本の南岸を通過し、7日から8日にかけてと14日から16日にかけては広い範囲で大雪となり、関東甲信地方を中心に最深積雪の記録を更新したところがあった。
- ・北日本から西日本にかけて月平均気温は平年並だが、気温の低い日が多かった。
- ・日本海側では、降雪量は少なかった。

(気象庁) - 2014年3月3日

電気使用量 集計
第5期中期3ヶ年計画 H26.5.1～H29.4.30

年 月	kw	平均気温	冷暖平均	※基準比	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	※基準比	半期集計	年間集計	
26 5	2,083	18.7		0.6																-61.78%			
26 6	2,323	21.9	23.5	0.3																-68.78%	15,943	37,075	
26 7	3,653	25.1		-1.7																-61.47%			
26 8	3,070	26.0		1.6																-48.85%			
26 9	2,299	21.1		-0.3																-57.52%	-60.2%		
26 10	2,515	16.6		0.5																-59.82%			
26 11	3,730	11.5	6.2	1.6																-60.68%	21,132	-61.1%	
26 12	3,982	3.9		-0.5																-62.46%			
27 1	4,262	3.2		-0.8																-67.62%			
27 2	3,725	3.7		-1.5																-61.05%			
27 3	3,127	8.5		-0.9																-60.65%	-61.8%		
27 4	2,306	13.6		-0.5																-49.93%			
27 5	2,383	20.2		2.1																-56.28%			
27 6	2,434	21.4	24.2	-0.2																-67.28%	17,001	37,797	
27 7	3,852	25.6		-1.2																-59.38%			
27 8	3,017	25.4		1.0																-49.73%			
27 9	2,706	24.4		3.0																-50.00%	-57.5%		
27 10	2,609	17.0		0.9																-58.32%			
27 11	3,304	9.3	6.0	-0.6																-65.17%	20,796	-60.4%	
27 12	3,426	4.0		-0.4																-67.70%			
28 1	4,635	3.4		-0.6																-64.78%			
28 2	3,982	4.7		-0.5																-58.36%			
28 3	3,310	8.4		-1.0																-58.34%	-62.4%		
28 4	2,139	13.8		-0.3																-53.56%			
28 5	2,320	19.2		1.1																-57.43%			
28 6	2,658	21.7	23.9	0.1																-64.27%	22,464	45,888	
28 7	4,150	24.2		-2.6																-56.23%			
28 8	5,533	26.2		1.8																-7.81%			
28 9	4,018	23.3		1.9																-25.76%	-43.9%		
28 10	3,785	17.1		1.0																-39.53%			
28 11	4,889	9.5	5.9	-0.4																-48.47%	23,424	-51.9%	
28 12	4,448	6.0		1.6																-58.06%			
29 1	5,217	3.1		-0.9																-60.36%			
29 2	3,557	4.3		-0.9																-62.81%			
29 3	3,173	6.6		-2.8																-60.07%	-57.7%		
29 4	2,140	13.2		-0.9																-53.54%			

世界の二酸化炭素濃度の増加と海洋酸性化が進行中

WMOの温室効果ガス世界資料センターとして、気象庁が大气中の温室効果ガス観測データについて世界の専門家と協力して解析した結果、2013年の世界の二酸化炭素濃度(CO2、年平均)と前年からの年増加量は観測史上最も大きかったことが判明しました。大気CO2増加に伴い、世界の海洋酸性化も進行しています。今回の解析結果によると、大気中の主要な温室効果ガスである二酸化炭素(CO2)、メタン(CH4)及び一酸化窒素(N2O)は増加を続けており、2013年における世界平均濃度(年平均)は過去最高値を記録しています。さらに、CO2の2012年からの年増加量は1984年以降で最も大きい2.9ppmとなりました。また、長期間の海洋時系列観測データの解析から、人為起源によって増え続けた大気中の二酸化炭素を海洋が吸収してきたため、海洋酸性化が世界的に進行しており、海洋の生態系への影響が懸念されています。

(気象庁) - 2014年9月9日 -

平成27年(2015年)8月中旬以降の不順な天候

平成27年(2015年)8月中旬から9月上旬にかけて、西日本から東北の広い範囲で平年より降水量が多く、日照時間が少ない状態となりました。このような不順な天候は、本州付近に前線が停滞し、低気圧の影響を受けやすかったこと、台風第15号、第17号、第18号が日本に影響(うち第15号、第18号は上陸)したことによってもたらされました。本州付近に前線が停滞した要因としては、上空の偏西風がアジアの広い範囲で平年より南に偏り、加えて日本の西で南に蛇行したことが関連していたとみられます。

偏西風が南に偏り、また蛇行した要因としては、エルニーニョ現象の影響でアジア域のモンスーンに伴う対流活動が不活発だったことが関連していたとみられます。

(気象庁) - 2015年9月18日 -

日本海の水温と酸素量の変化について

日本海における2010年以降の海洋気象観測船の観測結果を解析し、日本海深層(2500m～3500m)での水温の上昇及び酸素量の減少が進んでいることを確認しました。2010年以降、深層において昇温と貧酸素化が進行していることは、海洋循環が弱まり、低温で酸素を多く含んだ海水が深層に供給されていないことを示唆しています。その原因として、近年冬季において、著しく気温が低い年の頻度が減ったため、低温で酸素を多く含んだ海水が形成されにくくなっていることが考えられます。将来にわたり、このような深層での昇温と貧酸素化の傾向が続くと、日本海の生態系への影響が懸念されます。

(気象庁) - 2016年12月8日 -

電気使用量 集計
第6期中期3ヶ年計画 H29.5.1～R2.4.30

年	月	kw	平均気温	冷暖平均	※基準差	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	※基準比	半期集計	年間集計	
29	5	2,715	19.1		1.9																-50.18%			
29	6	2,805	20.9	23.6	0.3																-62.30%	16,792		
29	7	3,372	26.4		2.2																	-64.44%		
29	8	2,837	25.1		-0.5																	-52.73%		
29	9	2,548	21.9		0.0																	-52.92%	-58.1%	37,193
29	10	2,515	15.7		-0.4																-59.82%			
29	11	3,745	9.6	5.6	-0.5																-60.52%			
29	12	3,546	3.8		-1.1																	-66.57%	20,401	-61.0%
30	1	4,832	2.0		-0.5																	-63.29%		
30	2	3,560	3.1		-0.2																	-62.78%		
30	3	2,713	9.7		2.9																-65.86%			
30	4	2,005	15.3		2.8																-56.47%			
30	5	2,556	18.8		1.6																-53.10%			
30	6	2,731	21.9	24.6	1.3																-63.29%	16,875		
30	7	3,671	27.6		3.4																	-61.28%		
30	8	3,165	26.9		1.3																	-47.27%		
30	9	2,415	21.9		0.0																	-55.38%	-57.9%	35,774
30	10	2,337	17.7		1.6																-62.66%			
30	11	2,572	12.4		2.3																-72.89%			
30	12	3,499	5.5	6.9	0.6																-67.01%	18,899	-62.5%	
31	1	4,287	3.0		0.5																	-67.43%		
31	2	3,663	4.9		1.6																	-61.70%		
31	3	2,666	8.6		1.8																	-66.45%	-65.9%	
31	4	2,212	12.1		-0.4																-51.98%			
1	5	2,403	19.3		2.1																-55.91%			
1	6	2,413	20.9	24.0	0.3																-67.57%	16,436		
1	7	3,376	23.7		-0.5																	-64.40%		
1	8	3,266	27.4		1.8																	-45.58%		
1	9	2,731	23.9		2.0																	-49.54%	-59.0%	34,905
1	10	2,247	18.3		2.2																-64.10%			
1	11	3,028	11.0		0.9																-68.08%			
1	12	3,512	6.0	7.4	1.1																-66.89%	18,469	-63.4%	
2	1	3,952	5.0		2.5																	-69.97%		
2	2	3,270	5.8		2.5																	-65.81%		
2	3	2,725	9.1		2.3																	-65.71%	-66.6%	
2	4	1,982	11.4		-1.1																-56.97%			

世界の年平均気温が歴代3位となる見込み

気象庁では、地球温暖化の実態を把握するため、世界及び日本の気温の経年変化を監視しています。

2017年の世界の年平均気温偏差(速報値)は+0.39℃で、統計を開始した1891年以降で3番目に高い値となる見込みです。また、2017年は世界の平均気温を上昇させる傾向があるエルニーニョ現象が発生していない年の中では最も高い年となる見込みです。世界の年平均気温は、長期的には100年あたり0.73℃の割合で上昇しています。2017年の日本の年平均気温偏差(1891～2010年の30年平均値からの偏差)は+0.38℃で、統計を開始した1898年以降で10番目に高い値となる見込みです(第1位は2016年の+0.88℃)。日本の年平均気温は、長期的には100年あたり1.20℃の割合で上昇しており、特に1990年代以降、高温となる年が多くなっています。(気象庁)ー2017年12月21日ー

今年の南極オゾンホール～南極オゾンホールは回復傾向～

気象庁が米国航空宇宙局(NASA)の気象観測データを基に解析した結果、2018年の南極オゾンホールは、例年と同様に8月頃に観測され始め、9月20日に今年の最大面積である2,460万km²(南極大陸の約1.8倍)まで拡大しました。今年は、南極上空(高度20km付近)の気温が低く、南極オゾンホールの面積は、8月下旬以降、最近10年間の平均値より概ね大きく推移しています。オゾン層破壊物質の濃度は緩やかに減少しているものの、依然として高い状態にあり、気象状況によって南極オゾンホールの面積は大きくなる場合があります。今年は、南極オゾンホールの面積が大きくなる気象状況下にありましたが、2000年以降の最大面積は統計的に有意な縮小傾向を示しています。このことから、南極オゾンホールは回復傾向にあると考えられてます。(気象庁)ー2018年11月6日

令和元年台風第19号に伴う大雨の要因について

令和元年台風19号の接近、上陸に伴い、台風経路の左側にあたる東日本から東北地方を中心に広い範囲で記録的な大雨となりました。この特徴的な降水分布となった理由は、数値シミュレーションを実施し、現実的な地形がある場合と地形を除去した場合の降水量分布を計算して、前線などによる降水と地形の影響による降水について分析しました。この結果から、台風経路の左側にあたる東日本から東北地方を中心に記録的な大雨となった特徴的な降水量分布は、温帯低気圧に構造が変化する過程でみられる、大陸の高気圧の本州付近への張り出しに伴う比較的低温の空気と北上する台風周辺の暖かく湿った空気との間で前線が形成、強化されたことが原因とわかりました。(気象庁)ー2019年12月23日

電気使用量 集計

第7期中期3ヶ年計画 R2.5.1～R5.4.30

年 月	kw	平均気温	冷暖平均	※基準差	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	※基準比	半期集計	年間集計
2 5	2,299	18.7		1.5																-57.82%	15,164	35,200
2 6	1,901	22.5	24.4	1.9																-74.45%		
2 7	2,676	23.3		-0.9																	-71.78%	
2 8	3,913	28.2	2.6																	-34.81%		
2 9	2,214	23.5	1.6																	-59.09%		
2 10	2,161	16.1	0.0																	-65.47%		
2 11	3,040	11.5	1.4																	-67.96%		
2 12	4,169	5.0	0.1																	-60.69%		
3 1	4,991	2.8	7.1	0.3																-62.08%		
3 2	3,581	5.5	2.2																	-62.56%		
3 3	2,469	10.6	3.8																	-68.93%		
3 4	1,786	13.5	1.0																	-61.22%		
3 5	2,095	18.3		1.1																-61.56%	14,721	33,287
3 6	2,716	21.8	21.8	1.2																-63.49%		
3 7	2,882	25.2	23.6	1.0																-69.61%		
3 8	2,695	26.2		0.6																	-55.10%	
3 9	2,269	21.3	-0.6																	-58.07%		
3 10	2,064	16.8	0.7																	-67.02%		
3 11	2,551	11.5	1.4																	-73.11%		
3 12	3,740	5.4	0.5																	-64.74%		
4 1	4,074	2.2	6.3	-0.3																-69.05%		
4 2	3,582	3.1	-0.2																	-62.55%		
4 3	2,704	9.1	2.3																	-65.97%		
4 4	1,915	14.3	1.8																	-58.42%		
4 5	2,030	17.8		0.6																-62.75%	15,090	32,660
4 6	2,660	22.2	1.6																	-64.25%		
4 7	3,103	26.6	2.4																	-67.27%		
4 8	2,772	26.6	1.0																	-53.82%		
4 9	2,415	23.6	1.7																	-55.38%		
4 10	2,110	16.0	-0.1																	-66.29%		
4 11	3,070	12.4	2.3																	-67.64%		
4 12	3,171	5.0	0.1																	-70.10%		
5 1	4,055	3.1	7.4	0.6																-69.19%		
5 2	3,124	5.0	1.7																	-67.34%		
5 3	2,228	11.3	4.5																	-71.96%		
5 4	1,922	14.6	2.1																	-58.27%		

令和2年7月の記録的大雨や日照不足の特徴とその要因について
 気象庁は、本日開催した異常気象分析検討会の検討結果を踏まえ、本年7月の記録的大雨や日照不足の特徴と大規模な大気の流れから見た要因についてとりまとめました。
 日本付近では上空の偏西風の北上が遅れたことにより日本近海に梅雨前線が停滞し続け、前線に沿って西から流入した水蒸気と、平年より南西に張り出した太平洋高気圧の影響で南西から流入した水蒸気が、日本付近で大量に集中しました。
 さらに黄海付近では上空の気圧の谷が現れやすく、その影響で西日本や東日本付近では上昇流が強まって梅雨前線の活動が強化され、大雨の降りやすい状態が続いたとみられます。
 (気象庁)－2020年8月20日

今年の南極オゾンホール
 今年の南極オゾンホールは、最近10年間の平均値より大きく推移し、その最大面積は、2,480万km²(南極大陸の約1.8倍)でした。南極オゾンホールの2000年以降の縮小傾向は継続しています。
 気象庁が米国航空宇宙局(NASA)の衛星観測データをもとに解析した結果、2021年の南極オゾンホールは、例年と同様に8月に観測され始め、10月7日に今年の最大面積である2,480万km²(南極大陸の約1.8倍)まで拡大しました。南極オゾンホールの面積は、9月中旬以降、最近10年間の平均値より大きく推移しています。
 (気象庁)－2021年11月17日

2022年(令和4年)の天候と台風のみとめ(速報)
 日本の年平均気温は7898年の統計開始以降で最も高い値となる見込みです。
 高温が顕著だった6月下旬には東・西日本で、7月上旬には北日本で、1946年の統計開始以降、当該旬として1位の記録的な高温となりました。
 8月は梅雨前線や湿った空気の影響を受け北・東日本で不順な天候となりました。東北北部・南部と北陸地方では梅雨明けが特定できませんでした。
 台風の発生数は平年並の25個でした。日本への台風の接近数は平年並の11個で、そのうち3個が上陸しました。
 (気象庁)－2022年12月22日